



A L P S CAREER

＜シリーズ連載：今求められるキャリア開発 第48回＞

習うより慣れろ、 百聞は一見に如かず

ちょっと変わった仕事

私の社会人としての初めての職場は、卒業・修了した大学の研究室で、研究員というなんとも半端な肩書きでした。それまで博士前期課程までの都合6年を過ごした大学に、さらに2年もいる事になるとは夢にも思いませんでしたが、大船渡に来る事になる直前のこの2年間で、今の私にとって良くも悪くも大きな影響を与えるものでした。

「研究員」という肩書きで社会人を名乗る人は最近でこそ少しずつ増えていても、世の中全般で多い訳も無く、学生の延長上にあるような宙ぶらりんな感覚にはずいぶんと戸惑ったものです。しかし、子供の頃から夢の延長でもある考古学の世界に身を置く上で、特に優秀でもない私の存在としては贅沢な場所であったかもしれない。私は学生時代に考古学を学び、発掘作業と

いうアルバイトをして、研究員として大学で遺跡調査の報告書作成の業務に就いていました。

この2年の間、同じ場所であつた学生ではない人間として過ごす事はほとんどできていなかったと思います。学生ではない、働いて稼ぐ一個の社会的な人間として常識を身に付けていたら、生まれ育った東京という街にもっと固執していたかもしれない。遺跡の発掘を仕事にする事自体やめてしまっていたのではとも思います。そうすると公務員という仕事、職業の選択肢から消えてしまう訳です。

正直な話、大学に長く居続けた人間には、学部で卒業し就職した人とはまた違った常識が身に付くもので、言ってしまうえば企業人からすれば、「非常識、世間知らず」などと言われかねませんが、私自身にとってはこの世間知らずが大船渡に来るにあたって最も大きく大事な要素であつたように思います。



笹間 正紘

大船渡市教育委員会生涯学習課文化財係

【ささま まさひろ】1985年東京生まれ。小学生の頃に考古学者を夢見、大学にて考古学を学び博士前期課程、研究員を経て、平成25年27歳の時に大船渡市の任期付職員として入庁。考古学以外の事は特に知らない世間知らずなまま遺跡の発掘調査に当たる。仕事は発掘、趣味は音楽と趣味人のような生活を続けている。「実体験と冒険心」を座右の銘に日々奮闘中。

「世間知らず」と「冒険心」の合わせ技

変わらない環境で自分を変えていくというのは非常に難しい事で、結局都内にいた最後の2年間で私自身、少しずつでも変わった実感は無く、マジナルマンとして苦悩する日々でした。しかし前職の研究員も2年間の縛りがあるもので、外に出て行かざるを得ない状況に追い込まれてしまう訳です。

学芸員専門の求職サイトを眺める日々に変化があつたのは、平成25年の2月、今思うと最終年度の残り2ヶ月まで何も決まっていなかったというかなり崖っぷちな状況でしたが、ここで大船渡市の任期付職員募集要項を目にしたのです。

大学生時代の同級生に大船渡出身の友人がおり、実は一度だけ震災前に旅行で大船渡には来た事がありました。山や森の代わりにはビルが立ち並び、海を見るのに一時間

発掘調査風景



程度電車で揺られれば良いような場所から、山や森、海が目の前に広がり、車が無ければ生活が立ち行かないなんて事には何の脅威も感じておらず、世間知らずで無自覚なまま応募した、というのが当時の自分であったと思います。

震災についても、当然ニュースを見て知っていましたし、大学生時代の友人とも連絡を取り合っていたので、東北沿岸部がどんな状況なのかを十分にわかっているつも

りでいた、というのも今考えればおこがましい話ですが、自分が何かの助けになれると思っていた訳ではありませんでした。私が行った事があり、しかも良くしてもらった場所が酷い事になっているという事実が、ただ許せなかったという少し子供っぽい発想もあつたのだと思います。

採用までの流れは私の感覚で言えば非常に「シンプルで滞りない」ものであつたように思います。書類を提出して書類選考の結果が届き、面接を受けて合格通知をもらう。こんな簡素な結果の裏にどんな想いがあつたのかは、実は今でもわかりません。

面接のために訪れた大船渡は、今から8年前に訪れた町並みとは全く別物で、覚えのあるショッピングモールが目に入らなければ来る場所を間違えたのでは無いかと思うほどでした。

東京以外の街を知らないが故の、東京以外の場所での生活をするのだという冒険心を一瞬忘れてしまうほどに大きく衝撃を受けたのは今でも鮮明な記憶ですが、安っぽいと言われてしまいそうですが、使命感に似た感情の芽生えを覚えたのもこの時でした。

担当職務

埋蔵文化財の発掘調査および、調査報告書作成を行う学芸員として採用された私は、入庁後すぐの4月中旬には調査現場に入る事が決まっております。

大船渡で最初の発掘調査に入るに当たって私の役割は、派遣職員の方が主担当を務める調査現場での調査補助でした。日誌や写真台帳用のカードのコピー、また立入禁止の札のコピー等地味な作業が最初は主でした。

調査が始まってからは、とにかく掘って製図して写真を撮る、の繰り返し作業。また調査員だけでなく、地域の方々から募った、20名近い臨時職員の方にも作業を行ってもらうため、掘り方に指示を出したり図面の取り方を教えたりといった事が中心です。

調査が終わると室内に入り、調査した遺構（住居跡や貯蔵穴等の事）の図面整理、写真の整理、また出土した遺物（土器や石器等）の資料化（写真、図面、拓本等を作成する事）や、臨時職員の方への指示出しや方法を教える事等が中心になります。これまでに中村遺跡、長谷堂貝塚群、長谷寺遺跡、宮野貝塚という4遺跡の調査を主、副それぞれで担当して参りましたが、現在は、調査主担当者として小出Iという遺跡の発掘調査に当たっています。

とにかくギャップ

実際の所、大船渡市の任期付職員として採用されてからは、大学から出る事で初めて事実上の就職を果たしたような気分でしたし、またそれ故に思っている事と実体験の内容のギャップに苦労の連続でした。

発掘調査に当たっている時よりも、プライベートな時間等での方が多かった最大のギャップは「必ずしも発掘調査が歓迎されていない」という事でした。

これは今でも私だけでなく、殊に被災地の埋蔵文化財職員全般に言える事であると思いますが、被災された方や特に地権者の方からは「なぜ自分の土地なのにすぐに家が建てられないのか」という旨のご意見をいただいた時に強く感じられる事であると思います。

発掘調査は被災地でなくとも、元々地権者の方には敬遠されるものと情報としてはわかっていたつもりでしたが、家を失い仮設住宅にお住まいの地権者の方がお怒りになる姿を初めてかいま見た際はとにかく悩ましく思います。私自身は、発掘に従事し、掘る事や図面を書く事が好きですし、遺跡発掘の調査員になるのが幼少期からの夢でもあったので、願ったり叶ったりとのんきな事を考えていたのです。しかし、発掘調査になれば、家が建つのにも時間がかかるし、補助金申請によって調査費用がまかなえる場合がある事が周知されていない部分もあり、「やりたくない事に自腹を切つて、お金払わなければならないのか」といった旨のご意見もありました。

発掘調査の目的は、「国民共有の財産である埋蔵文化財の保護」であり、この仕事を愛する私自身にとって、発掘が人の生活の障害となっているという感覚は不足して

いたように思います。私自身が実態に対して無知であった事も含め、被災地での発掘調査に対する考え方は被災後初めて大船渡に訪れた際の埋蔵文化財職員として人の役に立てるようにがんばろうという使命感を揺るがせるには十分に衝撃的なものでした。

常に前向きに、感謝を持って

人との繋がりが大事だと殊更意識するようになったのも大船渡にきてからであつたと思います。休憩時間等に臨時職員の方々と触れ合う時間が思いのほか大切だつたと思っています。臨時職員として発掘調査を選んでくださった方々の中に、発掘に対して悪印象を持っている方がいなかったというのも、当然と言えば当然の話ですが、私自身これは大きな救いでした。

本庁の同僚上司の方々はもちろんの事、肩書き上の線引きは必要ですが、右も左もわからない場所での一人生活をする上で、日常的に最も密に接する臨時職員の方々には大変良くしていただいています。

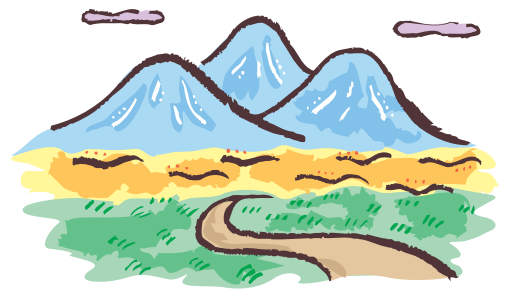
これと言って印象的なエピソードのようなものがある訳では無いのですが、臨時職員の方々は朝一番に採れ立ての海産物を持ってきてくださったり、自宅のドアノブに野菜を引っ掛けておいてくださったり、地域の人々の感情や諸々の事情についてお話をいただいたりと、今現在自分が東京から500キロも離れたこの土地で一人生活を

する上で、無くてはならない人間関係を構築できたのも、これまでの私にはほとんど無かった、非常に希有な体験です。

大船渡にきた当初の発掘のイメージのギャップによる敗北感に近いような衝撃は、発掘調査を通じてつくる事ができた人との繋がりによってだいぶ緩和できたと思っています。

市職員として業務に当たる上でも、実態としては初めての社会人のような状態で、右も左もわからず不安になる事ばかりでしたが、私にとつてかけがえの無い人間関係を構築できた事の他に、やはり大きかったのが、先輩職員や同僚、上司の方々が非常に優しい人たちばかりだった事です。

社会人歴3年目と言いつつ、学生と何ら変わらないような私に対して心苦しくもどかしい思いを、今なおさせてしまっている





遺構確認風景

事に、私自身もどかしく思っています。しかし、根気よく優しくも厳しく、同じ事でも繰り返し教えてくださる、なかなあで曖昧な上下関係ではなく、きちんと線引きされた先輩・後輩、上司・部下の関係が非常に心地よく感じられています。

任期に限りがあるというのは非常に残念な事です、今とにかく思うのは私に良くしてくださる皆様に、どれだけのご恩返しができるのかという事です。まだ知識・経験ともに未熟であり、公務員としてはおろか、社会人としてすらままならないような私に、それでもできる限りの事をしてくださる皆様に私ができる事は、してくれた分だけ、必死に食らいついて知識・経験を増

やし業務に対して真摯に向き合っていく事に他ならないとも思っています。

大船渡は他の自治体と比べても発掘調査が多い印象のある場所です。本年度は派遣職員1人を含めても、調査担当ができる人員は5人と少数なため、発掘調査件数が増えると1人で対応せざるを得ない状況です。しかも、そのうち2人は事務対応に追われ実際に調査担当ができるのは私を含めて3人が限度。そういった状況で、なるべく事務を担当する調査員の先輩方の手を煩わせないようにする事がさしあつての目標であり、こいつに任せておけば安心と思わせる事ができればしめたもの。今後大船渡に在る間に、そんな発掘調査員になる事が今の私の大きな目標です。

悩ましく思う事

自分なりに目標を持ってみても、大船渡にきてからは、不安と失敗の連続です。発掘調査は専門知識が不可欠な業務ですが、やはり全ては経験が物を言います。どれだけ掘ってきたか、どれだけ土を見てきたかで調査成果の精緻さが変わってしまいます。そこに掘られた穴があるかどうかの見極めを失敗すると、図面や写真撮影に支障をきたしますが、正直な話見極めには失敗してばかりです。

また発掘調査現場の監督役を務めるにあたって最も不安に思うのは、人の管理です。

臨時職員の方々で私よりも年下の方は少ないですし、年齢の上下に関わらず肩書きで線引きをせねばならない部分は非常に気を遣います。

研究員時代は大学で長く付き合いのある先輩が主な相手でしたが、それが急に人生の先輩に当たる年齢の方々に指示を出すという事の違和感にはじめはすいぶん戸惑ったものです。現在においても戸惑いはありますし、ちょっとした言葉の使い方や相手に不快な思いをさせて、職務に影響がないかどうか戦々恐々であります。

人の管理において気を遣うのは感情や空気の部分だけではなく、発掘現場という場所にも大きな問題があります。調査開始時は重機で表土掘削を行うためヘルメットの着用等けがやその他の体調にも気を遣わなければなりません。夏場の日差しが強く暑い時期等は適宜休憩を増やす等の対応も必要になります。

幸いにもこれまでに、大きな事故やけが等は無く人命に関わる事態に陥った事はありませんが、今後も学芸員として遺跡発掘の業務を続けていく上で避けられない課題でもあります。悩ましくは思いますが、大船渡で任期付職員として様々な初体験をし、得た物、またこれから得ていく物は知識や技術のみならず、責任や使命感といった物も含め、今後の私にとってかけがえの無い実態のある経験になると確信しています。